

命を守る予防医療 「がん検診」

不調を感じて病院やクリニックに行く。病氣と診断されて、薬を飲みはじめ...

「医療」という言葉には、体に異常を感じてから病院で受ける検査や治療というイメージがあります。しかし、本来は病氣の早期発見や重症化の予防といった意味も含まれています。

自覚症状が現れにくい病氣は少なくありません。毎年国内では約100万人が診断されているほか、日本人の2人に1人がかかり、3人に1人が亡くなる原因第一位「がん」も、早期では無症状であることがほとんどです。

今号では、いつ自分や大切な人にふりかかるかもしれない病からかけがえのない命を守り、健康に過ごしていくために必要な「がん検診」の重要性について考えます。

健康づくり課 電話 94-4616

全ての人に関わる予防医療という概念

生活習慣の改善や予防接種などによって病氣になるのを防ぐだけでなく、たとえ病氣になっても早期に発見・治療して重症化を防ぎ、さらには病氣からの回復を早め、再発を防ぐことまでを含めた概念です。

●予防医療「3つの段階」

- 1次予防** 生活習慣を改善し、適度な運動によって健康的な体を維持したり、予防接種を受けたりして病氣を未然に防ぐこと。
- 2次予防** 定期検診や検査などで早期に病氣を発見することにより、病氣の早期治療に取り組むこと◇がん検診はここに該当します
- 3次予防** 病氣になっても適切な治療により病氣の増悪防止に努めたりリハビリにより病氣の回復や再発防止を図ったりすること。

長引くコロナ禍、進むがん検診控え

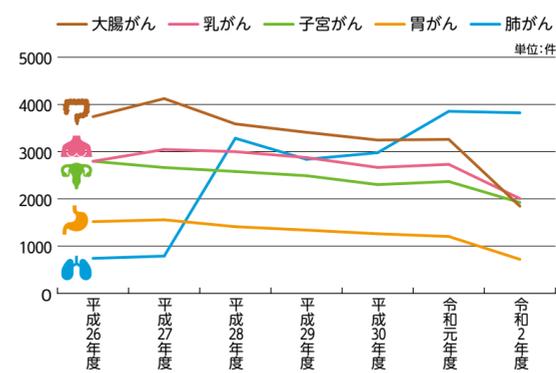
がんは、今や「治る病」ともいわれています。ところが、治療につながる早期発見に黄色信号がともっています。

感染症の流行に伴い、医療機関の受診をためらったり、定期検診や検査を後回しにしたりする傾向が強まっているからです。このため、本来見つかはずの病状に気付かず、診断が遅れ、最適な治療を受けられなかったことが影響し、死亡リスクが高まっていることが懸念されています。

日本対がん協会の調査によれば、全国の医療機関における令和2年の5つのがん(胃・大腸・肺・乳・子宮けい)の診断数は8万660件。前年より9.2%減ったことが判明しています。

市内においても同様の傾向がある

市が行うがん検診の受診者数の推移



※肺がん検診の受診者数が増えているのは平成28(2016)年から市内・近隣市で「いきいき検診(特定・一般健康診査)」と同時受診できるようになり、その後毎年受診可能な医療機関が増えているため

知っておきたい、がん治療のキーワード

若い人や、罹患した家族が周りにないないという人の中には、がんのことがよく分からないということがあ

5年生存率

診断を受けてから一定期間後に生存している確率のことを「生存率」といい、がん患者の生存率はその治療効果を判定する重要な指標とされています。

ステージ

がんの進行度がどのようになっているかの指標です。一般的にがんの大きさ(広がり)やリンパ節への転移の有無、他の臓器への転移を元に0からIVの5段階で表します◇数字が大きくなるほどがんが進行していることを意味します

三大治療

がんになってしまったら次の治療方法があります。

手術(外科治療)

がん細胞が転移している可能性も考慮し、目に見えるがん組織だけでなく周囲のリンパ節を取り除き、外科的にがんを切除する方法。

放射線治療

遺伝子を傷つけて分裂しないようにしたり、細胞が脱落する現象を強くしたりすることでがん細胞を減らす方法。

薬物療法(抗がん剤治療)

がんに関わるホルモンの作用を抑えたり、がん細胞の原因となっているタンパク質を攻撃したりする物質・抗体を投与する方法。

完治と寛解

がんへの対処が上手くいった状態として表現される言葉です。

完治

手術が完全に成功した場合など、体内からがんを取り去れた状態のこと※再発・転移する可能性がゼロではないため、術後一定の期間は検査が必要。5年間再発しなければ完治したとみなします

寛解

がんが一時的に縮小・消失しているなどの理由で発症していない状態が続いていること※がん細胞が増えたり転移したりする可能性があるため治療や診察を継続する場合があります

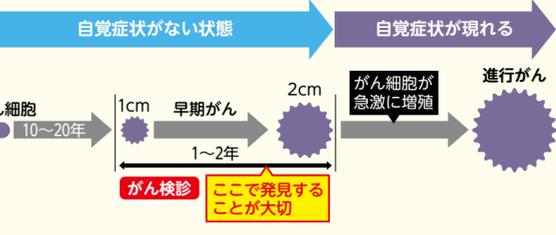
健診と検診には大きな違いがあります

「けんしん」を辞書で引くと健診と検診の記載がありますが、この2つには大きな違いがあります。健診は「健康診断」の略で、特定の病氣を検査するものではなく、多くの項目で体の状態を全体的に評価すること。病氣の発生を未然に防ぐことを目的とした検査です。さらに多くの項目、より精密な検査を行う場合、「ドック」ということもあります。一方、検診は「特定の病氣にかかっているかどうか」を調べるために診察・検査などを行うこと。病氣にならないためではなく、早期に病氣を発見し治療することを目的とした検査です。

早い段階で発見されると生存率が高まります

私たちの体は約60兆個の細胞からできており、日々いくつもの細胞が死に、新たな細胞が分裂(コピー)によって生まれています。検診を受け、自覚症状のない早期のステージで見つけることで治療の選択肢を広げることができます。そのため、定期的に受診することが大切です。

1つのがん細胞が進行がんになるまでのイメージ(乳がんの場合)



肺がん・結核検診

対象(年度末年齢)=40歳以上の人 自己負担金=200円

肺のX線検査

肺がんは、日本人のがんによる死亡数の第一位です。レントゲン検査で肺全体を写すために大きく息を吸い込み、しっかり息を止めて撮影します◇[集団検診]と特定(一般)健康診査と併せて行う「施設検診(契約医療機関のみ)」があります

胃がん検診

対象(年度末年齢)=40歳以上の人 自己負担金=1200円

バリウムによるX線撮影

胃がんは、早い段階では自覚症状がほとんどなく、かなり進行しても症状がでない場合があります。検査は胃をふくらます薬(発泡剤)とバリウム(造影剤)を飲み、胃の中の粘膜を観察します◇公民館などで行う「集団検診」です

大腸がん検診

対象(年度末年齢)=40歳以上の人 自己負担金=500円

便潜血反応

食生活の欧米化で大腸がんの死亡者数は年々増加しています。検査は2日分の便の表面をこすりとり提出します。便に血が混じっていないかを調べ、目に見えないわずかな出血を検知することが可能です◇公民館などで行う「集団検診」です

伊勢原市が行っているがん検診について

市では、市内在住の人を対象に次の検診を実施しています。電話か直接市役所分室1階の担当、または県の電子申請システムでお申し込みください◇全て事前予約制。がん検診の日程や会場など詳しくは原則1日3面の「健康・子育て」に掲載しています

市で行ったがん検診の結果(令和2年度)

| | 受診者数 | 要精密検査数 | がんであった人 |
|----------|-------------|--------|---------|
| 肺がん・結核検診 | 3822 | 161 | 6 |
| 胃がん検診 | 721 | 22 | 2 |
| 大腸がん検診 | 1846 | 107 | 6 |
| 乳がん検診 | 視触診のみ | 83 | 0 |
| | 視触診+マンモグラフィ | 1924 | 129 |
| 子宮がん検診 | 1924 | 17 | 1 |

※早期発見・早期治療には精密検査を受診することが重要です。精密検査が必要となった場合は必ず受診するようにしてください

がん治療の最前線

「健康な人はがんと無縁」という意識は変えてもらいたい

産婦人科に勤務する傍ら、医学部で学生たちに教鞭をとっている三上医師にがん検診に係る素朴な疑問にお答えいただきました。

東海大学医学部 三上 幹男教授

一自覚症状がない場合、受ける必要はない?

検診の目的は早期に発見し、適切な治療を行うことで死亡リスクを減らすこと。したがって、症状がない時だからこそ、受けるべきです。症状がでた時には、すでにがんは目で見える状態になっていることが多く、その段階では「病院にかかる」ことが必要です。

一健康的な食事や適度な運動を心がけていれば、罹患しない?

発生原因の中には喫煙や飲酒、偏食、運動不足といった生活習慣があります。ただし、それらは要因の一つに過ぎません。不規則な日常生活が主たる原因である糖尿病や高血圧、脂質血症とは異なるのです。

規則正しい生活を送ればある程度予防できます。しかし、それだけではありません。胃がんであればヒドロウイルス、子宮けいがんはヒトパポウイルス

5月12日は看護の日です

近代看護の母といわれるナイチンゲールの誕生日にちなみ、看護の心を分かち合おうという思いから、平成2(1990)年に国により制定されています。常に危険と隣り合わせである医療の現場で私たちの命や健康を守ろうと日々奔走する医療従事者に思いを寄せ、助け合いの気持ちを育むきっかけにしましょう。

下糟屋にある東海大学医学部付属病院は、湘南・県西・一部県央地域の中核病院であるほか、県内随一のがん治療実績と新規がん治療薬の治験実績があり、令和元(2019)年9月には国から「がんゲノム医療*拠点病院」に指定されています。今回は国民病ともいえるがんの治療に向き合っているフロンタランナーのお二人にお話を伺いました。

*がん細胞の遺伝子を網羅的に調べて遺伝情報を解析し、エキスパートパネルと呼ばれる専門家チームが議論し、最適な治療法を分析すること

同じような悩みを抱える人々の受け皿のような存在になれば

院内には専門の相談員が治療や療養生活全般の相談に対応する「がん相談支援センター」があります。そこで働いている西川さんは患者や家族が抱える悩みや問題の解決に向けた糸口を探るため、日々尽力しています。

当院は高度救命救急センターがあり、三次救急医療施設として重症患者さんの治療に当たっているため、皆さんにとって少し敷居が高い医療機関だと感じるかもしれません。しかし、そんなことはありません。私の所属しているがん相談支援センター(☎93-3805◇受付時間=月~金曜日の午前10時~午後3時、第1・3・5土曜日の午前10時~正午)では、専門の相談員ががんに関する不安や悩みを抱えている方の相談を受け付け、課題解決に向けたお手伝いをしています。次のような悩みを抱えている患者やご家族であれば現在当院にかかっていなくても無料で相談できますので、お気軽にご連絡いただければと思います。

◆治療のことで悩んでいる(緩和ケアや医療費など)

◆セカンドオピニオンについて相談したい ◆仕事や働き方など今後のことが不安 ◆できるだけ自宅で家族と過ごしたい

気軽に語らえる交流の場「がんサロン」センターではほかにも、患者や家族が病氣のことや生活のことなどを本音で語り合う場があります。以前は対面で行っていましたが、免疫力の低くなっている参加者が多く感染のリスクもあるため開催を見合わせていました。

コロナ禍においても活動の必要性を鑑み、昨年の1月からは定員を制限した上で奇数月の第3金曜日の午後3時~4時にオンライン開催するようになりました。視聴方法など詳しくは当院のホームページ、または右のQRコードからご確認ください。



ソーシャルワーカー 西川 静枝さん

コロナ禍でも安心して受けることができます

国立研究開発法人国立がん研究センターが公表した「院内がん登録2020年全国集計」によると、感染症に伴う影響により早期のものを中心にがん発見数が減少した可能性が高いと考えられています。必要な受診は、不要不急の外出にあたりません。検診実施機関では、院内感染防止のガイドラインなどにに基づき、換気や消毒、体調チェックなど基本的な感染防止策をとっています。安心して受診してください。

健康づくり課 海崎 史主査